Osaka University Knowledge Archive

Title	1950年代の海外展における日本デザインのディスプレイとそのコンセプト
Author(s)	寺尾, 藍子
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53417
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

1950年代の海外展における日本デザインのディスプレイとそのコンセプト

寺尾藍子／石川県輪島漆芸美術館

1950年代日本の輸出拡大政策を担った国際見本市をはじめとする，海外展へ出品されたディスプレイデザインを検討する。商工省工芸指導所，のちの通産省産業工芸試験所（以下産工試と表記）は伝統技法による製品や雑貨品を近代調に適合させ，それにふさわしい方法での宣伝を引き受けていた。海外展を舞台としてモダンデザインに則った手法の模索と確立が急速に進められた，これはその後の日本発現の雛形となるデザイン手法の獲得の過程でもある。

モダンデザインと伝統の融合を日本のデザイナーが意識するきっかけとして，1950年に工芸指導所へ招聘されたイサム・ノグチの影響を看過できない。８月１日から工芸指導所において試作研究を開始し，1950年８月18日から30日には日本橋三越でイサム・ノグチ作品展を行う。ノグチがデザインした家具や石膏およびテラコッタの作品等を展示した。設計は谷口吉郎が担当し，展示会場での詳細なアレンジにはノグチとともに猪熊弦一郎および工芸指導所のスタッフが協力した。斬新な意匠が現代的なスペースに配置されただけではなく，製品に竹，畳，藁など日本の伝統的な素材を起用するなど固有文化への積極的なアプローチが見られた。剣持勇意匠部長はノグチに大きな刺激を受け，その造形に日本的なものを認めつつ，羨望ともとれる賛辞を送った。突破口を見出した剣持は，1952年には世界的なモダンデザインの潮流から自国の工業製品を捉え直すべく半年間にわたってアメリカに赴く。第一線で活躍するデザイナーたちと対談し，その直感を確信に変えていった。これらの着想が産工試で1953年ころから剣持を中心として本格的に始動する「近代日本調」の試作へとつながっていく。

1951年サンフランシスコ講和条約が締結され，戦後日本は自由貿易体制下で経済国として復興を目指すこととなった。1952年の発効以降，世界各地で盛んに開かれる国際見本市への積極的な参加が始まる。

海外展への出品は，おもに1951年輸出振興政策を図るために設立された海外市場調査会（のちの JETRO）内の海外見本市協議会が主導した。その依頼により，1953年のカナダ国際見本市では産工試が商談ブースの設計を行った。カナダでの展示はモダンデザインとして十分な役割を果たすものではなかったが，以降商談ブースの設置には彼らを始めとするデザインの専門家が携わることが多くなり，通産省の方針達成には産工試のデザイン活動が不可欠であったことに注目したい。

スウェーデン国際建築工業デザイン博覧会（通称 H55）は1955年６月10日から同年８月28日にかけて，スウェーデン，ヘルシンボリ市にて行われた。H55は第二次大戦後初のデザインと建築の博覧会として世界各国の注目を浴びた。その内容は住宅や都市計画，公共施設等の展示で，第２次大戦後10年，復興事業の結実をデザインと建築の領域で表現すべく，北欧４カ国の工芸品が一堂に会すものであった。さらに各国の住宅を展示する国際館にはスイス，イギリス，フランス，日本，西ドイツ，デンマーク，フィンランド，スウェーデンの順に，全８カ国の住宅モデル・ルームが長屋式に南北に並列した。国ごとに

通り抜けられるものもガラスから覗くものもあったという。鉄骨組立に屋根には白いビニールがカンバス状に張られた。国際館は戦後10年のデザインの様相を各国ごとに明確に比較する貴重な機会となった。

日本の伝統的民家の田の字構造を採用した10フィート四方の日本ブースが剣持勇意匠部長の主導のもと，千葉大学建築科出身の松本哲夫によって設計された。室内意匠においては兵庫県芦屋の通気性に優れた夏の住宅が参考とされている。また，勅使河原蒼風の金属製オブジェや篠田桃紅の書，猪熊弦一郎デザインの浴衣地などが配された。このような伝統的構造を採用した日本の展示は，博覧会が開催されるやいなやスウェーデン国内紙にてさかんに取り上げられた。これらは「近代と伝統の様式の調和」「新しい生活様式や素材に対応する伝統的形式」「エキゾチック」あるいは「洗練された簡素な美」「シンプリシティ」といった点を挙げて日本の展示を賞賛した。

1958年ベルギー，ブリュッセルにて戦後初の万国博覧会が開催された。国際博覧会規約による博覧会として，約20年ぶりの開催となった。博覧会事務局には戦後の海外見本市での経験が多いJETRO（海外貿易振興会）があたることになった。1956年の春日本館設計者として前川國男が正式に選出された。

日本館の展示における総体的な構成の立案および監督が前川に一任され，展示計画および建設が進められた。展示計画プロセスの初段階で，全体にシナリオを与え，各部の構成を立案した。日本館には「日本人の手と機械」というサブタイトルが設定され，日本人の手に現代文明までいたるインテリジェンスと，文化の根源的な主体性を求めた。第二次世界大戦後までを「第１部歴史」として，国立博物館からの出品を中心に，日本のバックボーンを描き，「第２部産業」では日野ディーゼルのダンプを主役にして，特に秀でた電子工学の技術を紹介しながら日本の戦後の躍進へと展開する。さらに「第３部生活」の伝統的技法に基づいた日本の工芸品の展示が現れ，生来の日本人手の仕事にストーリーが帰結した。

前川國男が設計した日本館は万博にて金星賞を受賞し，前川建築は近代建築と伝統様式が見事に融合したものと評価された。全体審査においては120館中９位であった。統一的なコンセプトのもと伝統的精神が近代技術に収斂され，モダンデザインを体現した一つの到達点といえるだろう。もちろん，「簡素美」「受け継がれた時代的関連性」「近代建築と伝統様式の融合」といった点に強調されているように，ここに到達するためには文化のオリジナリティを表現することが不可欠であった。彼らの評価のなかには，「日本においても日本的な寺院以外に，より日本的なものは容易に見出せる」との指摘があった。それは，日本のデザインが，海外から向けられたまなざしのなかの日本を脱却したことを印象づける言及評価ではないだろうか。

日本館の展示は，端的に表せば，工業力ではまだまだ先進諸国に及ばぬ日本の，近代化におけるインフェリオリティの克服に相違ない。最先端の技術と最大の資産によってしのぎを削った列強に，日本のデザインは温かく新鮮な印象をもって受け入れられたことだろう。斯くして50年代の日本は，高度成長の時代にバトンを繋いだ。